

氏名(本籍)	福井崇史(東京都)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第2333号
学位授与年月日	平成20年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	外見の修辞学：19世紀末アメリカ文学と人の「見た目」を巡る諸言説

主査	筑波大学教授	博士(文学)	浜名恵美
副査	筑波大学教授	博士(文学)	宮本陽一郎
副査	筑波大学教授	文学博士	鷺津浩子
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	吉原ゆかり
副査	筑波大学講師	博士(文学)	齋藤一
副査	筑波大学講師	博士(文学)	清水知子

論文の内容の要旨

本論文の目的は、19世紀末アメリカ文学における人の「見た目」を巡る諸言説を、その言説編成のプロセスと影響という観点から新たに考察することである。

本論文の構成は以下の通りである。

- 序章 「リアリズム」≡「リアル」：地上的なものとしての19世紀末アメリカ文学
- 第1章 「彼ら」の顔と「我々」の顔：『シーザーの記念柱』の自己否定する表象論理
- 第2章 衣服は人を作らない：1890年のアルジャー作品と「美しき犯罪者」言説
- 第3章 あるリアリズム作家の「肖像」：「ザ・リアル・シング」の「リアルさ」
- 第4章 「指紋」から「血」へ：『まぬけのウィルソン』の視線の行き着く先
- 第5章 「色」と「血」の政治学：「有色でない有色人」を巡る作品群と不可視の「人種」性
- 結章 世紀を越える狂想曲：終わらなき人の「見た目」の政治化

序章は、先行研究を批判的に検討し、この分野の研究が抱えている問題を検証し、19世紀末アメリカ「リアリズム」文学とは地上的な動因によって動かされるプロットを備え、作中人物を含む表象対象を血統的な比喻形象を用いて綴った文学作品であると再定義し、続いて「見た目」を巡る諸言説をいかに分析すべきかを検討している。

第1章は、「リアリズム」文学と同時期に流行したユートピア文学の流れに属するテキスト、イグネイシャス・ドネリー作『シーザーの記念柱』(1890年)をとりあげ、さまざまな出自をもつ登場人物たちの「見た目」と「中身」を描出するにあたって骨相学／観相学的に意味付与された言語表象化を施していることに着目し、そこに崩壊するアメリカから脱出する「我々」と淘汰される「彼ら」を差異化しようとする意図が読み取れるものの、こうしたステレオタイプの表象による「我々」と「彼ら」を差異化する試みが、このテキスト内にある表象実践によって裏切られていると論じている。

第2章は、「大衆文学」といわれる小説テキスト群の中からホレイショ・アルジャーの2つのテキスト(1867

年、1890年)をとりあげ、「見た目」の表象論理の変化に注目し、その原因を2作の出版の間に量産されたアラン・ピンカートンら本職の探偵たちによる回想録テキストに見出す。ここでは変装を駆使する犯罪者が描かれ、しかも多くがまったく欠点のない「見た目」をもっていたとする「美しき犯罪者」言説が形成されていたことを明らかにし、これらのテキストと読者層を共有していた1890年代のアルジャー作品においては「見た目」が「中身」の指標とならないことが裏書きされてしまっているとする。

第3章は、ヘンリー・ジェイムズ作「ザ・リアル・シング」(1892年)をとりあげ、当時「リアリズム」を語る際の準拠とされた写真との関係、写真における人の「見た目」表象と「中身」との関係に注目し、「写真的」よりも「絵画的」な小説内表象を志向するジェイムズの「リアリズム」観の特異性を確認する。続いて、「ザ・リアル・シング」の語り手である挿絵画家が上流階級を描いた小説の挿絵用モデルとしてロンドンの下町娘と乞食同然のイタリア青年を採用すること、「見た目」も「中身」も貴族的に表象される前者の夫妻が、仮装や演技によって「見た目」上の階級性を移動できる後者に敗北を喫することを通して、「リアリズム」が決して一枚岩ではないことを例証しているとする。

第4章は、マーク・トウェイン作『まぬけのウィルソン』(*Pudd'nhead Wilson*, 1894年)をとりあげ、当時の人物特定技術の変遷をたどり、人の微細な「見た目」上の特質が犯罪者の特定に用いられる過程を追う。探偵的人物といえるウィルソンに殺人犯であると突き止められる人物トムは「混血」であり、「白人」と見紛う肌を持つ人物として表象されているが、幼時にその指紋を採取していたウィルソンにより殺人犯であることのみならず異母兄弟と幼少期にすり替わった黒人奴隷であることも暴露され、奴隷州に売り飛ばされるというプロットに着目し、当時のアメリカ社会が問題としていたのは人の「見た目」ではなかったことを明らかにしている。

第5章は、小説家・弁護士A.W.トゥアージェイ(Albion Winegar Tourgée)による1890年出版の作品、世紀末「リアリズム」文壇の大御所W.D.ハウエルズによる1891年の作品、「黒人」女性作家F.E.W.ハーパーによる1892年出版の作品をとりあげている。これらのテキストが中心人物を「見た目の白い『黒人』」として描き出していることに着目し、不可視の「黒人」性が書き手の持つ政治的意図によって決定的に異なる意味を付与されていることを確認し、「見た目」以外の要素に「中身」すなわち「人種」性を見ることで、逆に自らの指定する本質主義的思考に絡め取られていく、「色」に狂った19世紀末アメリカが見えてくるとする。

結章では、第1章から第5章までの成果をまとめ、さらに世紀を越えて20世紀のアメリカ文学から2007年のアメリカ大統領選挙における「黒人」候補オバマ氏を巡る言説までを展望し、近年の“whiteness studies”の成果にも目を配った上で、「見た目」の政治化が永続していると指摘している。

審査の結果の要旨

本論文が研究対象としている人の外見と中身の問題は、アメリカ文学・文化研究において文学理論、カルチュラル・スタディーズ、人種研究等の立場から注目されてきた。本論文は、これらの成果を批判的に継承しつつ、主流作家ならびに非主流作家による多数のテキストにおける人の「見た目」の諸言説がいかに本質主義的思考と関係していたかを新たに解明した、密度の濃い研究である。

本論文の著者は、世紀転換期に至るまで19世紀を通じてアメリカに存在していた、人間の「見た目」と「中身」の関係を論じた種々の問題系に注目している。対象とする諸文学テキストが、骨相学／観相学や職業探偵の操作方法、あるいは遺伝という「科学」言説などの提起する種々の問題系と互に相互作用し、人間の「見た目」と「中身」をどう関係するものとして表象していたのかを綿密に分析している。この作業を通じ、著者は19世紀アメリカに流通した種々の「学」や「術」が拠り所としていた、人間の「見た目」から本質

的な「中身」についての情報を引き出そうとする思考法は、表面上は世紀末にかけて破棄されるように見えながら、実は、その論理構造自体は世紀を越えて温存され続けたことを明らかにしている。

本論文が示した独創性は、特定の作家のみを扱う作家論とせず、主流ならびに非主流の多数のテキストを分析し、人の「見た目」の諸言説をめぐる新しい19世紀末アメリカ文学・文化論となっていることである。本論文の著者は、19世紀末アメリカにおける人の「見た目」と「中身」の関連という独自の切り口から、同時代の「階級」や「人種」をめぐる議論を切り開くことにより、一見関連性が薄いように思える複数の文化的事象（俗的「科学」、探偵小説、写真技術、生物学的「人種主義」）のつながりを解明している。リアリズム文学論争と人種言説とが交錯する19世紀末の「外見を巡る修辞学」に問題を設定した本論文は、リアリズム期文学論および人種言説論の最先端の研究成果を挙げたものとして高く評価できる。特に1980-90年代のA.カプランやW.B.マイケルズによる画期的なリアリズム論に伍して十分にその存在意義を持つものである。各章の問題設定はいずれも切れ味がよく、新たな洞察を示し、著者の優れた資質を物語っている。第2章、第3章、第5章では、徹底したリサーチにより深化する展開が見られ、著者の進境ぶりを示すものとして、いっそう高い評価に値する。結章に関しても、本論の単純な総括とせず、今後の題材を意欲的にとりあげている点も若手の学究として積極的に評価できる。

以上のように、本論文は力作であるが、課題がないわけではない。本論文の前半と後半の一部でリアリズム論と「見た目」論とが必ずしも十分に統合されていない。さらに「天上学・地上学」という枠組み、「写真（フォトグラフ）」という概念の規定に、少しく厳密さを欠いている。

とはいえ、人の「見た目」の諸言説の考察として本論文が提示した斬新な知見は、同時代の研究領域に多大な貢献を成すものであり、きわめて高い価値を持つものと判断される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。